

（一）現代文

【出題意図】

出題文は高村峰生『触れることのモダニティ』（以文社）に拠った。身体性に関わる評論文は高校教科書にも採録されており、難解なテーマではないが、触覚を他の感覚の差異化し、それを古代の認識（アリストテレスなど）が近代に変化したこと（フロイトの思想などの影響）の流れに沿って、歴史的・社会的・文化的に捉え直す興味深い文章である。

【採点のポイント】

問一 単なる漢字の知識だけで無く、出題文の内容理解と関わる知識が必要となる。

問二 触覚がすべての生命体にとって生存に不可欠であり、直接対象に触れる唯一の感覚として機能し、身体が存立するための根本的条件として位置づけられていることを理解し説明できているか。また、「～ということ」という適切な文末表現の使用と 60 字程度という制限内での簡潔な表現も採点のポイントとなる。

問三 「触覚」の位置づけの変化であるので、始めがどうで、いつ何によって、どう変化したかが書けているかどうか重要。具体的には「西洋の長い歴史」、「周縁化」、「「真実」として本質化された」をそれぞれ文脈に即して説明できているか。

問四 近代と古代、モダニズムとプリミティズムという相反する概念が絡み合った関係についての説明を求めた設問である。近代においては、人間が自らを規制するような制度を文化として作り出す願望と、それを投げ捨てて原始的な状態に復帰したいという願望を併せ持っていることを傍線部分の前後から読み取ってまとめればよい。

問五 この部分の「葛藤」は矛盾する二つの事象について言っている。本文中に「欲望」と「抑圧」は対になって用いられている。

問六 内容理解と説明の問題。「触覚についての議論」がなぜ「感情の歴史的な考察」を含むことになるのかを、本文の文脈に沿って説明できているかどうか。「触覚」と「感情」の関係と、「個人」の感性が「社会」の影響を受けるということの 2 点を説明できている必要がある。

【講評】

問一 漢字の書き取りでは「示標」「坐折」など自分なりに意味を想像した誤答が目立った。「慮」の字形の崩れや偏の書き誤りも多く見られた。

問二 アリストテレスの触覚論における「根本的」の含意を文脈から読み取り言い換える問題だった。多くの受験者は触覚の生命維持における重要性は理解していたが、その直接性や身体存立との関係まで踏み込めた答案は少なかった。また、「どういうことか」という問いに対して「～ということ」で締めくくるところ、「～ため」「～から」などとしている答

案があった。

問三 「西洋の長い歴史」であるので、19世紀と20世紀の比較ではなく、アリストテレス以来の「触覚」軽視から語る必要がある。また、触覚は人間と動物を区別する指標になっていた、と誤解した答案があったが、むしろ本文中では、人間にも動物にもある感覚とされている。「触覚」という感覚そのものが変化したのではなく、文化的な位置づけが変化したことに注意したい。

問四 文化を投げ捨てることで幸福になれるのではないかというノスタルジックな反応については多くの答案で記述できていたが、自らを規制するような制度や文化もまた人間の心性に基づいて作られているという要素と関連させて説明できているかどうかで差が生じた。また、設問の求めに対して不適切な文末で記した解答は減点対象とした。

問五 「接触」「禁令」という誤答が多く見られた。空所補充の問いであるが直近・直前にある語句に着目する誤答である。文脈や文章全体をしっかりと読んで解答するよう心掛けたい。

問六 感情は単に個人的に決定されるのではなく歴史的・文化的な要素の影響を受けるという点については解答できている答案が多かったが、なぜ触覚についての議論がそうした感情の議論に接続されるのかを含めて適切に解答できなければ完答にならない。また、解答に不必要な情報や表現が含まれているために文意にねじれが生じ、減点した答案も少なかった。

(二) 古文

【出題意図】

『今鏡』村上の源氏第七「根合」から、郁芳門院が逝去し、父の白河院や乳母子の藤原知信が悲嘆にくれる様子を描いた部分を取りあげた。語句の意味・用法、人物相互の関係をとらえたうえで、的確に文脈を把握し、人物の心情を推しはかることが求められる。また、同じ贈答歌を収載する『金葉和歌集』を参考資料として掲げ、両者の相違点を適切に指摘できるかをみた。こうした観察力は、入学後の作品研究においても基礎のひとつとなる。比較的平易な文章であるので、全文を的確に現代語訳できる程度に意味・内容を把握する読解力を身につけておきたいところである。

【採点のポイント】

問一 まずきちんと助動詞を抜き出せていなければ得点にはならない。そのうえで(終止形でないものを)正しく終止形に直せるか、的確な助動詞の意味を選べるかをみた。なお、余分なものを抜き出した場合はその数に応じて減点した。

問二 白河院が娘の郁芳門院の逝去による嘆き・悲しみの余り出家したこと、という趣旨をとらえていればよいが、この因果関係が明瞭に書けているかに注意した。

問三 「ことばを補って現代語訳しなさい」という設問なので、語句の辞書的な意味を記すだけでなく、文脈をふまえた補足説明が不可欠である。以下に示す点がポイントであった。

①「虫の音（ね）こそなかるれ」は、虫がつよく鳴く意であること。②「こそなかるれ」の係り結びの把握。助動詞「る」の自発の意味。③「なく」に「鳴く」「泣く」の二つの意味が込められており、〈虫の鳴き声〉に〈私の泣き声〉が重ねられていることの把握。④「なく」理由の説明。

問四 ①本文中の歌二首・作者二名について、金葉集記載の二首・作者二名との対応関係を正しく把握できているか。②本文に記された作歌事情（作者と歌の関係・贈答の経緯）を正しく説明できているか。③金葉集では二首の作者と贈答経緯がどのように記されているかを正しく説明できているか。④金葉集が作者を取り違えた、という「誤り」の内容を明確に指摘できているか。

問五 ①「御悲しみ」の内容がとらえられているか。②「昔も類（たぐひ）あれど」の意味が把握できているか。③「かかること」の内容が具体的に説明されているか。

上記がポイントであるが、③の内容が的確に示されていることが、得点の前提となる。

【講評】

問一 多くの受験者は全て正解していた。誤答例としては、「給ひ」を抜き出した答案があったがこれは補助動詞であり、余分なものにあたるので減点。「に」の終止形を「なり」とした答案があった。また「き」の終止形を「し」「く」、また「けり」とした答案が目についた。抜き出しについて、「させ」でなく「せ」だけとしてしまった答案も少しあった。意味については、「させ」を「使役」とした答案、「に」を「断定」「存続」とした答案、「に」（完了）と「き」（過去）の意味を逆にした答案などがあった。

問二 「採点のポイント」で述べた因果関係が不明瞭なものは減点した。また、神社の大田楽の様子は白河院に間接的な影響は与えたかもしれないが、直接の原因とまでとらえるのは誤りであろう。答案の中には「大田楽により郁芳門院の葬儀ができなかった」ことや「大田楽が郁芳門院の逝去により中止になった」ことを白河院が嘆いて出家した、などとするものがあつたが、恣意的な読みこみであろう。

問三 傍線部「なかるれ」について、形容詞「なし」の活用形と誤解した例が少なくなかった。慣用表現「音（ね）を泣く」を思い出せば正解に近づけたはずである。問題文に「ことばを補って」とある補足説明については、「なく」には「鳴く」「泣く」と意味の異なる動詞があると気づくことで、前後の文脈をふまえて、和歌の贈り主である知信が今年も郁芳門院の死を悲しみ泣いていることが導きだせる。このような掛詞は和歌のおもしろさのひとつでもある。代表的なものは把握しておくといいだろう。これらに加え、係り結び、助動詞の意味などの文法知識を反映した訳が必要であつたが、すべてを満たした答案は限られていた。日頃から単語のひとつひとつを意識しながら文章を読むことを心がけてほしい。

問四 「誤り」の内容を贈歌の初句「かなしさに」（本文）―「うかりしに」（金葉集）の異

なりとみて、その指摘のみにとどまった答案が多く見られた。わかりやすい違いに目を奪われて、作者の取り違いという、事実関係の把握に影響を及ぼしかねない大きな「誤り」を見逃すべきでない。そもそも本文では、筑前の返歌「虫の音は」を記したのをうけて「と侍りしを、金葉集には……」とある。それに注意すれば、指摘すべき「誤り」が、知信歌「かなしさに」一首だけでなく、贈答二首にかかわるものであることがわかるだろう。丁寧な読解を心がけたい。

問五 ポイント①「御悲しみ」の内容は、子に先立たれた天皇・上皇の悲嘆ととらえられるであろうが、さらに一般的な深い悲嘆ととらえても誤りではないと考え、幅をもたせて採点した。一方、ポイント③「かかること」については、直前の一文の内容を具体的に示すことが必須となる。とくに、郁芳門院の生前と同様に女房や侍を伺候させたことは必ず記すべきであろう。それを含まず、金葉集の誤りや白河院の出家について説明する答案が、意外に多く目についた。出題文は物語の一部を切り出したものであり、最後にある文であるからといって、必ずしも全体のまとめになっているとは限らない。的確に文脈を把握できる読解力を身につけておきたい。

(三) 漢文

【出題意図】

今年度は『韓詩外伝』から出題した。総字数百十字程度で、おおむね例年並みの長さの文章。返り点・送り仮名を手がかりに内容を正しく読み取る力を備えているか、また、返り点の付け方や、基本的な語句の読みなど、漢文を読むための基礎的な学力が定着しているかを主眼に出題した。

【採点のポイント】

問一 漢文を読解する上で最も基本的かつ重要な語の読みについて問う問題。A「乃」は、ここでは「すなはち」と読む。同じく「すなはち」と読む「則」や「即」に比して「乃」は高校段階では登場回数が限られるが、ぜひこれくらいまでカバーしておきたい。Bの「索」は、動詞で文脈に合う読みを考えることとなる。「もとむ」だが、「而使之」と直後につながるため、「もとめて」が正解。「さぐりて」など意味の近い訓を導き出せた答案も正解とした。また、送り仮名がついていないもの、不適切な答案は減点した。C「孰」も、Aと同様に漢文の重要な助字。「たれか」、「いづれか」どちらでもよい。

全てについて歴史的仮名遣いでない答案は減点した。

問二 書き下し文に従って返り点を正しく付けられるかをみる問題。完答のもののみ、点数を与えた。返り点を付ける問題は、ほぼ毎年出題している。二重否定というやや複雑な句形であるので、入門期の学習がしっかり定着しているかどうか問われる。完答のもののみ点を与えた。

問三 問題文の内容を的確に読解できているかを問う問題。父の重い体罰を正面から受ける曾子の行為は人々に賞賛されたが、孔子は、曾子の行為には父に子殺しの罪を負わせる恐れがあり大いに問題があることを指摘した、という大意が理解できれば、正解出来る問題であろう。誤字は減点、二十五字に満たない答案は0点とした。

【講評】

問一 Aはおおむねよくできており、Bも文脈を読み解く力が問われる出題にもかかわらず正答率は低くなかった。一方で、Cは「いづくんぞ」との混同など不正確な答案が目立った。本学科入学後も必要な知識なので、重要助辞の読み方はしっかり勉強しておいてほしい。

問二 おおむねできていた。本学科受験を希望する者は、返り点の付け方はしっかりと学習しておいてほしい。

問三 予想よりも正答率は伸び悩んだ。最も目立ったのは、曾子が意図的に父を陥れた、という誤答。これは、文中の「陥」という字の意味を誤解したものと思われるが、罪と気づかないまま父の体罰を受けている曾子、という文章全体の前提と真っ向から食い違ってしまう。それに次いで、曾子が杖による暴行で父を死傷させた、という誤答も目立った。「罪」という出題の語や、文中の個別の字句から受ける直感に惑わされず、全体の意味を丹念に把握しようとする姿勢が求められる。